

第5回 旭川市民文化会館の在り方検討会 会議録（要旨）

会議名	第5回 旭川市民文化会館の在り方検討会
開催日	令和4年11月11日（金） 午後1時30分から午後3時10分まで
出席者 （敬称略）	参加者 6名出席 上田 信津子，佐藤 淳一，鈴木 雄太，竹田 郁，南 裕一， 森 傑 事務局 4名出席 社会教育部長，社会教育部次長，文化ホール担当課長， 市民文化会館主任
会議の公開非公開の別	公開
傍聴者数	3名
会議資料	別紙のとおり

1 開会

2 議事

進行役：

本日の議事だが，これまでの「旭川市民文化会館の在り方検討会」での議論を振り返った総括・確認を行い，補足や追加の意見があれば改めて伺いたい。

また，建替えあるいは大規模改修を行う際に，休館期間が発生するのが問題という意見があったが，感覚的に問題だと言うだけでは，未熟な議論になってしまう。

この点に関しても，事務局が整理した資料を用いて議論したい。

最初に議事1の「旭川市民文化会館の在り方検討会 全体の振り返りと総括について」のうち，本検討会の振り返りについて，事務局より説明願いたい。

事務局：

資料1の「1 会議開催経過」及び「2 第1回～第4回会議での主な意見」に基づき説明

進行役：

前回の会議では、一度事務局がこれまでの意見を整理したものに対し、更に意見をいただき、内容を深める形で議論を行ったが、その結果を整理した資料であったと思う。ほぼ網羅できていると思うが、何かお気付きの点等があれば発言いただきたい。

(参加者から意見・発言なし)

続いて、これらの意見を踏まえ「大規模改修して現施設を使い続けるか、新しく建替えるか」ということを考えたとき、どちらが妥当だと思うかについて、前回皆様にお伺いした。その結果についても事務局に整理いただいているので、説明願いたい。

事務局：

資料1の「3 『旭川市民文化会館の整備の方向性』に係る各参加者の意見」及び「4 『旭川市民文化会館の在り方検討会』全体の総括」に基づき説明

進行役：

こちら追加の意見や修正、お気付きの点があればと思うが、いかがか。

(参加者から意見・発言なし)

それでは、ここまでの検討会の振り返りと整備の方向性について、一定の議論・意見を整理・集約できたということで、一通りの取りまとめができたと思う。

続いて、休館期間や代替方法の現実性に関する資料について、事務局から説明願いたい。

事務局：

資料2「周辺地域における代替施設候補等」に基づき説明

進行役：

ぜひ参加者の皆様から意見を伺いたいが、何かお気付きの点や解説などいただければと思うが、いかがか。

参加者：

ここでの主たる比較対象は客席数になるが、客席数に対して何が変わってくるかという、客席のキャパシティだけでなく付加設備も変わってくる。

例えばリハーサル室については、1部屋しかない施設と大きな2部屋ある施設では、コンクールで多数の団体を回すことが可能かどうか、という部分に関わる。また、延床面積が小さいということは、楽器などの物を置く場所を確保できないことにもなり、実際に旭川市公会堂や旭川市大雪クリスタルホールではそうした場所がない。

こうした客席数以外の付加・付属の設備というのは、施設規模に比例するものなので、そうした意味でも大規模施設がなくなると、代替えは難しいと感じる。

進行役：

指摘いただいた点は私も同感であり、例えば数字で見ると、座席数が1,000席程度でも、延べ床面積が小さい施設がある。ホールが一つであり、付属する諸室が多少ある程度で、例えば中小ホールはなく、リハーサル室も数は少なく、展示室もない、ロビーやホワイエもそこまで広くないという施設であると思われる。

ホールを使うほどの規模にならない市民活動・発表等であっても、全て大ホールで行うようなイメージをもっていたらと思う。

参加者：

本州在住で音楽の演奏会等をホールで開催している方が、北海道で演奏する場合は、札幌と帯広のホールしか使用しないと話していた。旭川を利用しない理由を聞くと「使いづらいから」と言う。

なぜ、使いづらいのかと思い、個人的に調べてみたところ、帯広は旭川から170km離れてはいるが、席数は旭川市民文化会館と同程度である。またホームページ上の案内が分かりやすく、道外の方、若しくは道内の方でも、大規模な催事を開催しようとする、帯広が使いやすいというのは、そうした部分も関係するかもと感じたところ。

進行役：

北海道において札幌を中心に見ると、旭川に比べて帯広のほうが圧倒的に遠い感覚がある。一方で、道東側をカバーするというイベント開催側の位置付けによる部分もあるかもしれない。

参加者：

戦略的に考えると、札幌・旭川公演よりも、札幌でセンター公演やトリ公演、道東公演の方が集客的に良い。

進行役：

集客範囲の地域が重複してしまうという部分もあるのかもしれない。

参加者：

1,000人規模のイベントというと、吹奏楽が多いというイメージをもっていたが、旭川市民文化会館で、ほかにこういう使い方をしているというイベントの事例を挙げてほしい。

事務局：

規模の大きいものでは、興行系のコンサート等は満席になることもあり、最も集客がある催事の一つ。また、演劇においても、例年利用いただいている劇団四季公演などは非常に集客率が高い。興行的な催事は、1,000人以上入ることが多いものと認識している。

また、主催者側の人数が多い催事については、市民の発表会や吹奏楽のコンクールなどであり、こちらは保護者などで観客数も多くなる。

進行役：

出演者が多い催事に関して、苫小牧市での議論に際しても、この点は大きな話題として出ていた。例えば、有名な演者が一人で公演する催事にも色々と大変な部分があるが、ひっきりなしに市内の高校生・中学生等が順繰りに登壇する催事のキャパシティとでは、性格が違うという指摘があり、それが市外から来る興行を中心に考えたときの建物の話と、市民活動・道民活動にウエイトを置いて考えたときに、仮に延床面積は同じ13,000㎡の建物であっても、面積配分が変わってくるという議論があった。旭川市においても、その辺りは今後詰めていかなければならないと思う。

参加者：

吹奏楽の関係では、コンクールと吹奏楽祭で例年2日間利用している。出演者が多く、観客の親御さんが入れ替わりで見ると、集客はそれぞれ3,500～4,000人程度になる。

過去に大規模改修が計画されたとき、休館期間中の代替施設をどうするか、色々と検討を行った。多数のお客さんが入れ替わり出入りできる場所と考えたとき、資料2にある公会堂やクリスタルホールでは全く回せないため、旭川地場産業振興センターの大展示場か旭川大雪アリーナを使うしかないと考えていた。

しかし実際の利用を考えたとき、控え室が不足するという問題に加えて、別途ステージを組まないといけないため、使用の都度、莫大な費用負担が発生することが想定された。もし、以前の計画時に大規模改修が実現していたら、本当にどうしていたのだろうかと感じている。

参加者：

先程、1,000人規模の催事に関する話があったが、コンベンションも年に何度か1,000人規模の催事があり、大ホールを利用している。満席になることはあまりないが、やはり1,500席あると余裕をもって全体会議を実施できる。

また誘致で考えると、札幌や北見と競合してしまうので、旭川に会場がない期間が発生すると、そちらに流れてしまうことが想定される。

進行役：

座席に関して、建築・設計的な話になるが、例えば有名なアーティストのコンサートのときの座席と、学会や研究集会等の座席とで考えたとき、好きなアーティストが演奏するときには隙間なく座っていても観客は来場するが、学会等であると密着して座られると嫌なので、それなら参加しないといったことがある。

今の意見はすごく大事で、バッファがあるかどうかというのは、催事の性格によってかなり重要なファクターになってくる。例えば、中高生の発表会等は、荷物が多いために控え室だけでは全部を置けず、座席横や通路などまで置き場として使ってしまうといったことも起こる。座席数は、この辺りも見越して考えないといけないし、今のホールは昭和の設計であるが、現代的な施設では、座席の間隔や通路などにゆとりをもつ設計をしているので、そういうことと合わせながら考えていかなければいけない。逆に言うと面積が増えるという側面もある。

私に関わっている東神楽町で建設中の複合施設にも文化ホール機能があるが、そちらの議論に際しても「規模の大きなイベントは旭川に任せよう」という話があった。規模の小さい自治体が数十億規模の費用を負担するのではなく、そこは旭川に任せようという、ある意味、旭川に期待している部分でもある。

良い施設・大きな施設を造れば、当然旭川市の負担が大きくなるため難しいところであるが、周辺の小さな市町村は、身の丈に合ったコンパクト志向でホール的な建物の更新を進めているので、情報共有や意見交換をしながら、圏域全体で、各市町村で大規模イベントがあれば旭川が相談に乗るといったように、年間のイベントスケジュール等を積極的に考えていくことができればと、私自身も考えていた。

資料2のデータや皆様の意見を踏まえると、休館期間が発生したときの代替案を考えることは、なかなか難しいという根拠が出てきたかと思う。無理をすればできないこともないかもしれないが、現実的に考えたとき、市民やイベント主催者の方々がクオリティを担保できるかという部分と、先程指摘のあったとおり、何とか代替案を考え実行することによって、コストアップになるかもしれないという部分が大きなポイントになってくる。

印象としては、これを踏まえると休館中に代替施設を使用するというのは、あまり現実的でないと思う。

事務局から提示された資料はここで一通り説明いただいたが、参加者より、情報提供及び今後の議論に向けての問題提起があると伺っているので、発言願いたい。

参加者：

私自身は一利用者であるが、主催者として文化会館を利用されている方から、使いにくいと感じている部分等に係る意見も伺った。様々な方から伺った意見をこの場に提示し、議論していただけたらと思い、お話しさせていただく。

まずは財源に関して、新聞報道後に建替えなのか？大丈夫なのか？と聞かれたこともあり、やはり市民の方々は財源面を危惧しているという感覚がある。旭川市の予算に係り、建設事業等債がせつかく減ってきたのに、今 100 億を負担するというのは無理なのではないか、今あるものを大事に使えば良いのでは、という率直な意見を伺ったほか、料金やその回収の仕組みについても関心が大きいようで、初期費用が大きいとして、どのくらいの期間で回収できるのだろうかという話もあった。

財源以外の課題として、第 4 回会議では「旭川に来ない理由の情報収集と分析が必要になる。」という話があったが、旭川市民文化会館と札幌の Kitara、帯広市民文化ホールの 3 施設について比較しながら、①時間的な課題と、②料金設定の課題、③人材活用の課題の 3 点に関して意見をいただいたので、ここで紹介させていただきたい。

①時間的な課題に関しては、旭川が 21 時で終了であるのに対して、Kitara と帯広は 22 時までとホームページ上に記載されている。演劇だと大道具等の撤収に最低でも 1 時間程度を要する。逆算して終了時刻を 20 時、あるいは余裕を見て 19 時半に設定すると、開演時刻が早くなり、仕事が終わってから立ち寄ることができず、観客を集めることができない。それなら、最初から旭川はやめて、帯広や札幌にしよう、といったことを話しているという。もし 22 時までという時間設定であれば、ぜひ旭川で見たいという人もたくさんいると思うので、もう少し大きなイベントの開催も選択肢に入ってくるという。

また、小規模な市民の発表会等で利用されている方からは、16 時半・17 時半という 30 分の区切りが煩わしいといった指摘もあった。例えば 16 時・17 時といった他施設と同様の時間設定であれば、同じ感覚で時間設定が組める。また、開館時間があと 30 分早ければ準備が間に合うので、その点についても提案してほしいとのことであった。

②料金的な課題について、札幌や帯広は、ホームページ上で使用希望に係る情報を入力すると見込額が出力され、総額がどの程度になるかをシミュレーションすることができる。旭川は、ホームページ上に基本使用料、設備機器使用料、冷暖房料、入場料割増と個別に表記されているが、自分が実際に使用した場合の見込額がどうなるか一見して分かるようには表示されていない。過去に何度も使用している方は問題ないと思うが、初めて利用される方は、料金がいくらになるか分からず、使いにくい。

また、市内の文化、芸術、芸能団体を対象とした減免制度があるが、これも継続的に利用されている方は知っているが、初めて見た人にはとても分かりにくい。これに対して、札幌や帯広では、営利か非営利かによって料金設定が分かれており、分かりやすい。旭川も、せめて営利・非営利の料金区分を分け、施設の利用料金をシミュレーション可能な形にホームページを改修する必要があると思う。

建物自体の現状を変更するには大変な時間がかかると思うが、今できるところから、少しずつ集客を増やすアイデアとして、こういうことを考えてほしい。

③人材活用の課題であるが、旭川で吹奏楽の活動をしている子供たちは、皆とてもレベルが高く上手だと思う。文化会館は、音響を特に重視した施設ではないため、そこを利用する子供たちは上手に聞こえてほしいという思いで、一生懸命練習する。旭川で練習した子供たちが、東京など全国の大会へ行くと、音響の良い会場ですごく良く聞こえる。子供たちが使いたいと思えるよう、子供たちの意見も反映させてほしい。

また、旭川市民の中には、芸術に関わる方が数多くいるので、そうした人材と子供たちをつなげるシステムが構築できると良い。例えば、ある分野の芸術家に小学校へ来てほしいといったとき、文化会館に連絡すると、名簿に登録された芸術家の方から紹介してもらえるような仕組みを整備できると良い。また、常駐でなくても芸術監督を置き、その方から専門的な視点で意見をいただけるような関係性を構築できれば、普段あまり芸術分野に興味をもたない市民に対しても、専門的見地から様々な見識を提供していただくことで、市民意識の変革にもつながると思う。

これらは本検討会の主旨からは外れてしまうが、問題提起として、今後の具体的な検討プロセスの中で議論してもらえたらと思い、発言させていただいた。簡単などころから、建替えに向け少しずつステップアップしていくことで、市民感覚として「建替えがいいな」という思いを醸成できるような、線をつなぐような取組が、少しずつでもできれば良いと思う。

進行役：

非常に重要なヒアリングを実施いただき、ありがたく思う。指摘のあった財源の課題に加え、①時間設定の課題、②料金の課題、③人材活用の課題、これらに関連して、意見・感想等があれば、ぜひ発言をお願いしたい。

参加者：

時間に関して、東京や札幌では19時から始まり20時半に終わり、21時半くらいに撤収というコンサートが多かったが、旭川では、18時から始まる催事が多く、驚いた。18時半に開始して、日中仕事している人は来るのだろうか？と思う部分があり、違和感を抱いた部分でもある。

旭川では、どうしてもそうせざるを得ない面もあると思うが、もし自由度を高めることができれば、学校や仕事とも時間の融通を利かせられるのではないか。

また料金に関して、指摘の内容のほかに、支払いをクレジットカード等でできると良い。自動車税などもクレジットカードで払えるようになった現状、手数料に関する融通が、民間でも公共施設でも変わってきていると思う。予約から支払いまで、来館しなくても全てオンラインで気軽にできるよう、ぜひ改善してほしいと思う。

進行役：

良い面で捉えると、すごく市民に密着してきた施設であったと思う。細かい部分は打合わせで話をして決めて、これまで色々と地元で活動されてきた方が、気兼ねなく、ずっと継続して利用してくれていた。昔ながらの付き合いでの市民会館・文化活動という側面があったと思う。

一方で時代が変わってきている部分も当然にある。例えば、指摘のあった料金の話や予約の難しさは、新しい世代の方の新しい活動を排除している傾向があるとも言える。手続きが煩雑で面倒に感じられてしまい、間接的に新しい世代の方の文化活動を育むことに対して消極的なシステムになってしまっている可能性もある。

参加者：

時間設定に関しては、以前から別の会議等でも指摘してきたところ。職員の方の勤務体制に係る問題等もあるので厳しいのは分かるが、もう少しフレキシブルな方が、ホールにとって良いのではないだろうか。

例えば、今の運用では、午前9時ちょうどからの開館であるため、準備のために前日夜のホールを押さえないといけないが、そこが開いていれば、他団体が利用できる可能性があり、もったいない。

例えば8時半に入館できれば、前日の夜に準備でホールを押さえなくても良くなり、互いにウィンウィンの関係になると考えられる。そういう対応をしてくれる公共ホールは多いので、実施しても良いと思う。

進行役：

開館時間については、公共施設を直営で運営するのか、指定管理で運営するのか、PFI方式で民間に任せていくのかという仕組みの違いが一番分かりやすく反映される部分になる。

純粋な直営の場合、市職員が公共施設を管理することになるため、公共性は高くはなるが、勤務時間が関わってくる。これが指定管理になると、その辺りが柔軟になってくるため、夜間も開館できるようになる。さらにこれが民間中心になると、もっともっと柔軟になってくる。

今後、この文化会館を更新するのであれば、運営方式としてどのような体制を取るかという点が重要な論点になる。

参加者：

時間の面ですごく使いづらくて諦めたということがあったので、文化会館イコール時間にすごく厳しいという印象がある。落語の催事で、本来2席予定していたところ、すごくお客様の反応が良く、3席実施した結果、少し時間をオーバーしてしまい、会場費が倍かかってしまった。

色々と無理なことを投げかけてくる方もいるということは理解できるので、バランスを取るのには難しいと感じる。

参加者：

コンベンションの視点からすると、料金については、文化会館は公共施設なので安いというイメージで見られていると思う。その点は誘致に関して有利な点。

一方で、新たに施設を整備する場合、要した費用を回収できるような工夫は必要と感じる。使用料で回収するのか、それ以外の何かで回収するのか、市民から少しずつ回収するのか、興行主等から回収するのか。市民向けサービスを向上することも大事であるが、収入を得ていくことができるような工夫が必要がある。

進行役：

費用関係は大事な話である。逆に言うと、安く使えていることを理由に、早く閉じないといけないのを我慢しているなど、辛抱している方もいるかもしれない。この点は、色々とコミュニケーションしながら考えないといけない。少し料金が上がったとしても、サービスや使い勝手が良くなることで、メリットがあると評価される場面も出てくると思う。

参加者：

事務局から、実際に運営されている状況や分析なども伺えたらと思う。

事務局：

意見のとおり、他都市では営利・非営利で料金に差を設けているホールもあるが、営利・非営利の設定というのは非常に難しい部分もある。例えば地元企業が例年主催する「ジョイントコンサート」は、市内の高校・中学校の吹奏楽部が発表する機会を提供して、市民に聞いてもらうという趣旨の催事であり、主催者が営利事業者であっても非営利な事業である。また、コンベンションに関しても、例えば病院が主催する学会の場合、実施主体には営利の部分もあるが、催事の目的は営利とは異なる部分もある。逆に、非営利の団体でも、興行的な催事を実施する場合はあるので、団体の属性で考えるのか、利用形態によるのかなど、どのような取扱いかということも含め、慎重に検討する必要がある。

旭川市民文化会館では、料金設定に関して入場料割増という方式を取っており、設定された入場料が1,000円以下の催事であれば割増なし、以降、入場料に応じ、10割増し、20割増し、30割増しという設定になっているが、こうした部分は、今後状況によって検討が必要になってくるものと感じている。

また、芸術監督を呼ぶとなると、自ら発信することを主体とする、芸術的なホールということになり、費用負担も生じてくる。現在の旭川市民文化会館は貸館主体の施設であるため、新施設を整備する場合に、どのような施設にするのかというコンセプトの部分と絡めて検討していく必要がある。

ホールのコンセプトに関連してもう一点、「旭川に興行で来ないことがある」という話があったが、旭川市民文化会館では一斉受付として1年前から予約を受け付けている。ここで仮に、市内の文化団体が行う活動と興行系の団体が行う催事の利用希望が重複した場合、市内の文化団体が優先され、興行系の団体は抽選に参加することすらできない。元々興行のスケジュールが決まっていて、旭川で開催を想定していたとしても、1団体でも市内の文化団体と競合すると、その日程では実施できないということになる。

参加者：

興行の優先順位を下げることになった理由というのは、何かあるのだろうか。

事務局：

旭川市民文化会館条例施行規則の中で定まっていることから、文化会館が開館した時点でコンセプトとして、市内の文化活動の促進、文化振興という部分に強く重きを置いた、ということと思われる。

一方で、興行についても、市民が芸術に触れる機会の創出やまちのにぎわいの創出につながるという部分もあり、その辺りをどう考えていくのか、このホールを文化活動に特化するのか否か、市民寄り・観覧者寄りにするのかといった部分についても、今後検討していく必要があると考える。

参加者：

近隣町に良い施設が建設されていることで、旭川に求めるものが上がってきているという背景もあるのかもしれないと感じる。

進行役：

これまで旭川市民文化会館が実施してきたことは、ピュアに市民のための施設として運用されてきたものとして、評価している。直営の公共施設は多くの場合、とにかく市民を一番に、と優先順位を上げていく形を取っているが、これ自体は、現代でも否定されることなく、全国で同様の方針を取るホールや公共施設は、多々あると思う。

この辺りが、今後、旭川市が文化ホールの構想や計画を考えていく上で大きな論点になってくると思う。

苫小牧市では、その論点について、議論し切れなかった側面もある。当初、構想の段階では「市民のための施設」として、興行ばかりが入って吹奏楽等が我慢しないといけないといったことにならないよう、直営的なコンセプトの方のウエイトが高かったが、100億近い財源をどう捻出するのという議論に際し、直営的な運営には限界があるとしてPFIという方法を取っていくことになった。PFIの中にも様々な運営手法があるが、ほぼ必然的に指定管理になることから、経営が成り立つようにしていかなければならないということになった。旭川市の場合も、今後そうした財源の話や運営費等も含めて考えていかなければならない。

なお、私自身の経験と考えて言えば、料金設定を非営利と営利で分けることには、あまり賛成ではない。例えば、日本ではNPOをボランティア団体に近いものと認識しがちであるが、収益を次の事業展開や給料アップに使うといったことをしないのが「ノンプロフィット」であり、利益を上げないわけではない。この点を日本人は割と誤解しがちで、NPOイコールボランティア団体と思っている節があるが、全くそういうわけではない。

それよりは「市民か市民以外か」という区分方法のほうが筋は通ると思っており、ダイレクトに言うと「納税者か納税者でないのか」という話になる。納税されている方は、自分のまちに対して税金を払っているので、それだけのサービスを受ける権利があるということになる。営利・非営利についても議論があって良いと思うが、もう一つ大事なものは、市民は税金を払っていただいているので、納税者利用なのかそうでないのかという視点も、考えていただきたいと思う。

もう一点、人材の話に係り、以前紹介した事例でも「館長が大事」という話をさせていただいた。先程、事務局から芸術監督に関しては館のコンセプトが大事という話もあったが、芸術監督は必ずしも経営に長けているわけではない。仮に芸術監督的なことを本来の仕組みとして入れるのであれば、芸術監督と経営者のポジションの方を対等なレベルで配置するシステムが必要になると思う。例えば、芸術寄りのポジションが館長であるとしたら、同じくらいの権限で事務局長のような方を配置するといったように、そうしたことも考えた方が良いと思う。直営施設として芸術寄りに振るのであれば、芸術監督にお任せするのも良いと思うが、同時に経営的なマネジメントの部分も非常に大事になるので、人材に関しても、今後ぜひとも議論していただきたい。

財源についても、本検討会では大規模改修に30～40億円をかけることに対しては否定的な意見・雰囲気があると思うが、一方で約60億円の差、約3倍の費用になるので、「30～40億円と100億円は違う」という市民意見も当然あると思う。本検討会で費用を決められるわけではないが、良い指摘をいただいたと思う。

その他、コンベンションに関して、補足説明があると伺っているが、説明願いたい。

参加者：

参考としての情報提供であるが、「ユニークベニュー」という言葉を知っているだろうか。ホールの話から離れてしまうが、以前の議論でも、室内・室外をシームレスに使用でき、懇親会などを開催できるようなスペースが、コンベンションの主催者から求められているという話をさせていただいた。

旭川では、この10年ほどの間に北彩都ガーデンやデザインセンター、クリスタルホールやCoCoDeを利用する形で、新たにパッケージを構築してきた。仮に文化会館を更新する場合に、そうした機能を盛り込めると、コンベンションの面でより有利になるだけでなく、市民の方に気持ち良く使ってもらおう上でも、良い施設になると思う。観光的な観点でも、北彩都ガーデンや旭山動物園、上野ファームなど、旭川ならではの魅力があり、それらと絡めて魅力的な提案ができればと思う。

進行役：

建物について考えると、広々とした公園などに建てれば屋外空間を使えるが、街中に建てるとなかなかそういう機会はなさそうという感覚になると思う。しかし、例えば東京など土地がない場所では、屋外空間で良い雰囲気のところがないかといえそうではなく、屋上をガーデンにしたり、ビルの中層階にスカイガーデンのようなものを設けたりと、土地が狭くても屋外的な環境を工夫してデザインしている例がある。この機会に、今後の文化会館のイメージとして、どのような立地であれ屋内外、夏・冬も含めて、芸術活動・市民活動に使えるような形を考えていくという部分は、理論としても持っているといいのではないかと感じた。

文化会館を固く捉えてしまうと難しいが、屋外空間と絡めてうまくデザインすることで、文化会館でちょっとしたマルシェやビアガーデンのようなことも考えられたら、楽しいものになると思う。

本日は事務局で用意いただいた資料と、それに基づいた確認と振り返りに加え、参加者の皆様から出された情報や意見に関して意見交換をさせていただいた。今回が最後の会議なので、皆様から一言ずつ意見や感想などをお願いしたい。

参加者：

旭川はユネスコから認められたデザイン都市なので、見に来てくれた人が文化会館にも集まってくれて、それに対するツアーが造成されるなどして、バスが来たときに停まれるような場所があって、というスタイルで建設されればと思う。

質問として、吹奏楽など道内各地から文化会館に来るイベントの際に、大型バスが停められる駐車場が必要と思うが、いかがだろうか。

参加者：

吹奏楽は出演者数が非常に多いため、バスの乗降は大変。全国大会が開催される名古屋の国際会議場などは膨大な敷地があり問題ないが、ほとんどの施設はバスを駐車できるスペースがなく、道路で乗降しなければならないという施設が多い。

参加者：

以前、とある街へコンサートに行ったとき、遠方からツアーバスが来ていた。ファンの方が全国から集まることができる環境だと、呼べる興行も増えると感じた。

中心部では、大型バスがホテルで乗客を降ろした後に逃げる場所があまりないので、そうした部分も兼ねられたら良いと思う。現在は、ホテルから離れたところに駐車場所を確保していたり、大雪クリスタルホールの駐車場を使用し待機しているが、広い敷地に建てることのできるならば、多少はバスの駐停車スペースも確保できるのではないかと感じる。

進行役：

少し別の視点で考えると、バスが止められるというのは、すごくアクセシブルで目的地として考えたときにはすごく良いが、まち全体の人の流れを考えたときに、目的地に行って帰るだけというのは、途中の様々な場所に寄ってみようという部分が少し薄くなってしまう側面もある。どちらが良いというわけではなく、考え次第ではあるが、旭川に到着した方が、あまり心理的負担なく文化会館周辺まで足が伸びるのであれば、それも一つの良い例になるかと思う。

参加者：

イベントスペースの運営に携わっており、月に50件くらいイベントが入っているが、貸館と主催のバランスに関わる話などの部分で、共感する部分があった。文化会館と同様にほとんどは貸館であり、毎日違うイベントが開催されているので、色々な人が出入りしており、毎日雰囲気が違う。そこがすごく見えづらく、色が付きにくい。地域の人にとっては、何かをやっているけれど、何なのか分からない「謎の場所」なのだと思う。そこで「色」を付ける意味でも、落語会や上映会のほか、尖ったイベントも主催するようにしているが、そのバランスがすごく難しいと感じている。

文化会館も絶対的に市民に寄り添う場所であってほしいと思う反面、やはり何か尖った部分をもたないと、すごく分かりづらい施設になってしまうと思う。そうならないためには、施設自身が発信する、アイデンティティをもつといったことが、絶対的に大事になってくると思う。普段、足を運ばない人にとっても誇りに思えるような、あそこが良かったねと言ってもらえるようなアイデンティティを作っていくことが大事なのではないかと、難しいことと思いつつながら、考えていた。

参加者：

この先どのように決まっていくか現時点では分からないし、改修になる可能性もあると思うが、約100億円という費用をかけて建て替えるのであれば、本当に夢のあるもの、子供たちに伝わっていくものを造っていただきたいと思う。

例えば鷹栖町の児童・生徒は、利用予約が入っていない時間については、吹奏楽や合唱等で自由に鷹栖町のホールを使用することができる。旭川は学校数が多いので難しい部分もあると思うが、そうした取組もできると良い。

また、旭川は家具の街なので、旭川家具の椅子を入れて、さらに音響のことも考えて…となると、ものすごくお金がかかると思うが、そういう夢のある施設になると良いと思いながら参加させていただいた。

参加者：

旭川の吹奏楽は、大変素晴らしいと思うが、本人たちは当然のこととして、特段素晴らしいものと自覚されていないように感じており、そこが本当にもったいないと思っている。私たちの文化会館、私たちの誇り、私たちは文化会館があるから活動ができていて、といった声が、もっと旭川市民から上がってきても良い吹奏楽のレベルなのに、どうしてかな？という思いがあり、本検討会に参加させていただいた。

会議を通して、これまで積み上げてきた過去の議論があったからこそ、今この議論ができていていると思う。

旭川市民文化会館の方向性について、市民も関心があると思っており、この先を楽しみに感じている。現時点では予算が決まっているわけでもなく、この場は参加者からの意見聴取という場であっても、こういう議論ができたことは、次につながる大きな一歩であり、様々なメリット・デメリットなどを議論し、整理してきた会議録や資料が残るということだけでも、非常に価値が高いと思い、今後を期待もっている。

北海道として見たとき、やはり札幌と旭川は大事な都市だと思うので、この先の旭川市民文化会館の在り方が、北海道を支えるというくらいの気持ちで、利用者としても使わせていただきながら、今後を楽しみにさせていただきたいと思う。

参加者：

先日、コンサートで文化会館へ来たが、本検討会で様々な話を聞いた上で来ると、改めて気付かされる点が多くあった。ユニバーサルデザインなど、全然足りないものがあるというのは、実際に利用されている方から聞いて理解できたことで、自分の視点では見えない部分があるということを検討会の会議で知ることができた。

音響に関しても、あまりにもうるさいと感じる部分があり、やはり色々な人たちが「ここでやりたい」と思えるような施設を造ることが非常に大切だと思う。ここで公演することで、自分たちが作ってきたものが更に良くなるのであれば、文化の中心施設としての存在感や価値を示すこともできると思う。

今回はハード面の話が主であったが、ハードが良いばかりでもあまり意味がないと思う。私自身、演奏したり人に教える立場であることから、ソフト面、コンテンツとしての魅力を高めることで、市民の方々に見てもらえる機会が増えるように、自身の研鑽や洗練・教育の充実といったことが大事であり、それを十二分に発揮できる施設を造ってもらいたいと感じた。

進行役：

ここまで5回にわたって非常に生産的な意見のもと議論を重ねていただいたことについて、お礼申し上げます。

札幌文化芸術劇場には、良い雰囲気勉強できるスペースがあり、若い方はそういう情報を共有しているようで、心地良く、お洒落で、飲み物等を買うことができ、行き帰りが楽しめ、「劇場」と名前は付いているが、彼らからすると、演劇等は見ないけれども、行く場所になっている。

私個人として期待するところは、ホールというものは、音楽や芸術やイベント等がメインになる施設であるが、市民の方々が、そうした催事に直接関係なくても利用できるような機会・環境というものを、ぜひ実現していただきたいと思う。

今後、市の方針検討の素地としての情報だと思うが、私としては、財政面の確保も考えつつ、あまり悠長なことを言ってもいられない状況であると思うので、議論の間を開けずに、次年度以降も継続的に検討を重ねていただきたい。その際に、ぜひ積極的に、今回参加いただいた皆様を含め、市民の方が加わることができるような仕組みの中で、検討が進められることを期待したい。

事務局：

皆様のおかげで全5回の会議を無事に終了することができた。それぞれのお立場で大変お忙しい中、この会議に参加いただいたこと、また、多くの貴重な意見をいただいたことについて、改めて深く感謝申し上げます。

本検討会では、皆様から旭川市民文化会館の今後の整備の方向性に関する意見のみならず、その先にある課題や考慮すべき内容に関する意見、また、検討に当たっての進め方までを見据えた、様々な意見を幅広くいただいた。

今後については、社会教育部において、皆様からいただいた意見を踏まえ、今後、旭川市民文化会館をどう整備していくのかという「整備の方向性」を定めていきたいと考えている。

本検討会は、本日をもって終了となるが、今後、市民文化会館の整備に向けた具体的な検討を進めていくことになった場合には、改めて、市民の皆様から意見をいただく機会が必要と考えている。

皆様におかれては、今後とも様々な形で意見をいただければと思うので、よろしくお願い申し上げます。

3 閉会